

2001 年も最初の四半期を終えた。全国企業倒産の 3 月としての負債総額は 99 年に次ぐ戦後 2 番目の高水準であった。政府も 4 月 6 日に緊急経済対策を発表し、金融再生と産業再生に向けて痛みを伴う改革の方向を示した。現在、次期首相を決めるべく自民党内の選挙が白熱しているが、どの候補も経済対策を前面に出している。1 日も早く強いリーダーシップの下で、対策の実行に取り組んでほしいと願う。

一方で、首相が変わろうが、なかなかこれまでの枠組みを一朝一夕で変えることはできないだろうという白けた見方も根強い。なぜ小渕政権時代に出された経済戦略会議答申「日本経済再生への戦略」が実行できなかったのか。検証はされていないように思う。我々は政府に頼りすぎずに、自分たちの知恵で、足で未来を切り開いていくことが大切である。我々一人ひとりが自立創発型、参加協働型の社会システムの構築にコミットメントを強めることが必要である。

先週末、知人に誘われて滋賀県近江八幡での小さなワークショップに参加した。それは、成長する竹のいえをつくるという奇想天外なものであった。ネットを通じて集まった人たちが、竹林を切り開き、竹で茶室をつくり、出来上がったあかつきには野点をするという趣向である。茶室は竹の成長とともに大きくなる。できあがれば世界で初めてのものになるだろう。大阪と東京で活動する 30 代の女性 2 人と地元の竹材業者や竹細工職人たちが組んで始めたイベントだそうである。

話によると、最近竹の利用がさっぱりで、竹材業者も青息吐息であるという。竹林は切り出されない竹で鬱蒼としていた。しかし竹林の中は気持ちがいい。地球に多くの酸素を供給しているという。市民にもっと竹のことを知ってほしいという。私自身恥ずかしい話だが、竹が 1 年で成長すること、一度成長した竹の太さは変わらないことなど知らなかった。

このイベントは、滋賀県が行っている「湖国 21 世紀記念事業」の中の県民主体事業「水といのちの活動」の支援を受けていた。湖国 21 世紀記念事業は、『水といのちの対話～「自然と文化」の新たな実験～』をテーマとして、滋賀の地域資源を活用して人を結び新しいライフスタイル、社会システムの構築をめざしている。特徴的なのは、県民参加と実験的手法を大切にしていることだ。県民主体事業「水といのちの活動」ではこれまでの 3 次の募集を通じて 225 件が採択されている。いずれも負けず劣らずユニークなわくわくする試みである。

行政はきっかけを作ってくれるだけでいい。今回もネットを見て一人で長崎から参加した女の子がいた。職業も多彩である。1 日で 1 メートル成長するいえの姿はネットで配信されるという。次のワークショップの出会いを約束して別れた。小さな試みを積み重ね、日本を変えていこう。21 世紀は市民の世紀である。

平成 13 年 4 月 編集担当 石井 良一